

連載：クローズアップ在宅医療・介護⑱

ゲスト：クリニック医庵センター南・院長 半田宣弘 さん

## 患者に対する尊敬・敬愛の気持ちを大切に

小原道子さん（帝京平成大学薬学部教授）がホスト役として在宅医療・介護のプロフェッショナルをゲストに迎える本連載企画。今回はクリニック医庵センター南（神奈川県横浜市、医療法人社団フォルクモア）の院長である半田宣弘（はんだのぶひろ）さんにご登場いただいた。心臓血管外科の専門医として28年間臨床の第一線で診療を行ってきた半田さんが今、高齢者の在宅医療とどのように向き合っているのか。小原さんが聞いた。

（取材＝佐藤健太）

### 高齢者に希望を与える医療の実現に向けて…

小原さん 半田先生は、ご自身で高齢者の在宅医療の現場に出られております。どのようなお考えで患者さんと向き合っているのですか。

半田さん 高齢の方は長く人生を過ごされており、経験が豊かで健康にも気を使っている方が多くいます。それだけでリスペクトする対象になります。ですから高齢の方と話す際には、尊敬・敬愛の気持ちが大事です。その結果として、お互いの信頼が生まれ、私からの具体的なアドバイスを受け入れていただけるのであれば、とても嬉しいことです。このような姿勢で、高齢者の方々のお話を聞きながら、希望される医療を提供したいと思っています。

そして「どのような医療を提供するのか？」を考えたときに、私は「エビデンスに基づいた医療を提供したい」と考えます。患者さんの多くが高齢者の方ということもあり、必ずしもエビデンス通りとは言えないというケースも出てきますが、それで

も、可能な限り科学的な考え方で医療を提供したいという姿勢を貫きたいと思っています。

小原さん 「尊敬・敬愛の気持ちが題し」「希望される医療を提供する」という言葉は、私の胸に響くものがあります。「一日でも長く生きたい」という方もいれば、「多少人生が短くてもいいから薬や医療の世話にならずに住み慣れた場所で過ごしたい」など、さまざまな考え方があっていいと思います。

### 高齢者が気軽に始められる具体的なアドバイスが重要

半田さん 私が担当させていただいている高齢の方は、若くて70代であり、80代、90代が大半を占めています。高齢になるほど「数年かけて衰え、人生の最後を迎える」と考えてしまいがちで、ちょっとした怪我や病気でガタッと崩れてしまう方も多くいます。通常の医療であれば、そうした方に「画期的に状態の改善を得る医療を提供する」と考えますが、高齢者対象の医療の実現はとても難しい。ですから高齢の方は「も

うすぐお迎えが来るから」「だんだん弱っていく」と弱気になってしまうのです。

しかし私は「そうではないのだ」と、高齢の方に少しでも希望を持っていただけるような行動や取り組みを常日頃から考えています。実際に、寝たきりの人がきちんと歩けるようになることも少なからずあります。筋力が衰えると当然動けなくなるのですが、「若いころのように動けないけれど、運動すれば今の状況よりも動けるようになる」とお話しさせていただいています。

そういう話をすると、患者さんには「具体的に何をすればいいの？」とたずねてきます。そこで私が推奨しているのは、たとえば「かかと上げ」です。骨粗しょう症の骨を強くする効果があるとされています。歩行するにはかかとを上げることが

必須条件ですし、かかとを上げることで下半身の筋肉をほぼほぼ使うこととなります。こうしたことを外来にいらした全ての患者さんにも伝えていきます。それを律儀に取り組んでくださる人も忘れてしまう人がいますが、実際に元気に動けるようになる方が結構おられます。このように「具体的に何をやるのか？」ということをお伝えすることは非常に大切だと言えます。

小原さん ご高齢の患者さんにとって、健康を守る上で大切な部分をお聞かせください。

半田さん 高齢の方には「転倒による骨折」「認知症」「心臓血管系の病気」「誤嚥」という大きなリスクが4つあります。「転倒による骨折」に関しては、かかと上げを出発点と



今回の対談はリモートで実現した

連載：クローズアップ在宅医療・介護⑱

ゲスト：クリニック医庵センター南・院長 半田宣弘 さん

## 具体的なアドバイスで高齢者に分かりやすく



小原道子さん

して、歩行を安定させ転倒のリスクを下げる。「心臓血管系の病気」に関しては現在は治療する立場ではないですが、専門医を紹介することはできます。

「誤嚥」は、のどの機能を改善することが予防になります。たとえば具体策の1つとして、笛型のおもちゃを吹くことが誤嚥の予防につながると言われており、それを当院で準備して、「これを吹いてください」と渡しています。効果が出るか出ないかだけではなく、誤嚥予防の意識付けにもつながります。また、大きく口を開けて「あー」と声を出した後、歯を食いしばるということをやると咀嚼筋が鍛えられ、嚥下が安定すると言われています。

言葉で「嚥下に気を付けてください」と伝えるのではなく、何をすれば咀嚼筋を強くするのか明らかにし、そして気軽に始められる取り組みを

お伝えすることが大切になります。

小原さん 在宅医療では、訪問看護師、訪問薬剤師やケアマネジャー、ヘルパーなどさまざまな職種が患者さんと関わっています。今後の他職種連携の中では、訪問医以外の他の職種も、医師と情報を事前に共有したうえで「先生が言った、あれやってみようか」と患者さんに問いかけるなど、必要なことが繰り返し患者さんに伝わるような工夫も大切だと思います。

ご家族だけでなくヘルパーさんのように患者さんとの生活時間が長く、患者さんの歴史を知る方は、特にキーパーソンとして重要と感じています。医療に必要な情報の伝達を、生活視点に変換して伝えて頂く事で、例えばやる気がない人をやる気にさせることも可能ではないかと考えています。

半田さん 先ほど申し上げた通り、高齢の方とお話しする際には、敬愛の気持ちとリスペクトが大事です。これまで生きてこられたことに対する尊敬の気持ち、今は年を召されて、引退している方に対する敬愛の念をもって接すること。その結果として、お互いに信頼が生まれ、私からの具体的なアドバイスが受け入れられているのであれば、とても嬉しいですね。

### 「この人を最後まで見る」…使命感から生まれる敬愛精神

小原さん 医療は命に大きく関わっ

ていますが、実際に医療にお世話になっている時間は短くもありません。限られた時間の中で、先生の言葉やアドバイスが患者さんの心に響いていくのは尊敬の気持ちと敬愛の精神があるからこそだと思います。

薬剤師は患者さんに対して、敬愛やリスペクトを持てるかどうか…。具体的な一例として「看取りをしているかどうか」「終末期に接しているかどうか」に大きな違いがあるのではと思っています。

半田さん 私もそうだと思います。特に私は外科医でしたので、最後の最後まで患者さんを診させていただいておりました。治療をするのが最適な患者さんであれば、非常にリスクが高い患者さんもあります。手術をして元気になるのがベストですが、必ずしもそうならない場合もあり、障害が残ってしまう方もたくさん診てきました。

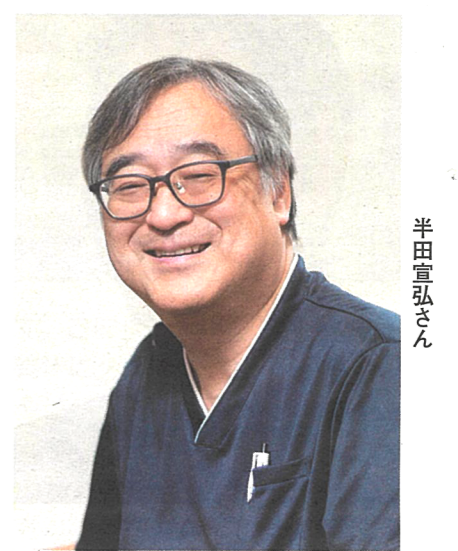
外科医は、内科の先生から依頼された患者さんの手術をするとき、「この人のことを最後まで診る」と腹を括って引き受けています。患者さんへの説明では、厳しい話と希望の持てる話を交えてするのですが、必ず「でも最悪の場合、亡くなってしまいう可能性もあるのですよ。その確率は何パーセントです」と話をします。実際にお亡くなりになる方もいますし、障害が残ると、その患者さんとお付き合いをしながら、最後まで診させてください。「最後まで看取らなければ」という気持ちが強く持っています。

最終的な責任は自分が負わなければならない。だからこそ患者さんに対し、敬愛とリスペクトを抱きます。確かに、薬剤師さんにおいてはそうした方は少ないかもしれませんが。現在病棟で働くフロアファーマシストが増えており、その場合は命の最後と接する経験をされていると思いますが、薬局にこもってしまうとそういう経験はなかなかできないと思います。

### 新型コロナの抗体価測定が生む社会的意義は大きい

小原さん 新型コロナウイルスが流行してから2年以上経過しています。医療という側面から打開策はまだまだ不足していますが、先生はコロナ対策や抗体価測定などの研究をしていると聞いています。

半田さん 新型コロナウイルスが流行し始めたころ、「ワクチン以外には出口がないだろう」という私見をすでに持っていました。当クリニ



半田宣弘さん

ックではチームを組み、積極的にワクチン接種に取り組みました。当クリニックは高齢者住宅の高齢者が上階に住んでいるので、その方々全員に接種してもらい、家族やクリニックに出入りする方々にも打っていただきました。建物全体で集団免疫に近いような状態ができあがりました。

その効果がどれほどあるのかと考えていましたが、抗体価測定は保険で認められておらず、それをやるクリニックはほとんど「金儲け主義ではないか」と思われるリスクがあり、「しない方がいいのではないかと迷っていました。しかし複数の患者さんから「抗体ができていないか知りたい」と相談を受けて、ニーズがあることがわかりました。これが決断に至った理由です。東京都健康長寿医療センターの倫理委員会に倫理審査してもらい、臨床研究として抗体価を測るということをやりました。

これまで170人ほど測ったのですが、「2回目の摂取から時間がたつと抗体価が下がる」と傾向がはっきりしましたし、「年齢の高い人の抗体価が低いケースが多い」という結果も出ました。

ワクチンを最初に打つ人、最後に打つ人がいますので、皆さんに同時進行で平等に打つことは不可能です。最初に打つ人は高齢者なのですが、高齢者も何百万人もいるわけで、その中でも「この人から」というのがわかっている具体的なデータが医療の判断の助けになっているという点で、「やって良かった」と思えるようになりました。

今後、私がしてきた抗体価測定の結果を社会にも是非報告したいと思っています。当クリニックでは3回目のワクチン摂取についても、1月中旬から積極的に打っている状況です。

小原さん 本日は貴重な時間をありがとうございました。

ヘルスケア＝予防で新たな市場を創造する

# 昇刊 H&Bリテイル

Health &amp; Beauty Retail

2022  
Vol.76

3

月刊H&Bリテイル 2022年3月号 通巻第76号 発行日：3月1日 発行元：ヘルスビジネスメディア 発行人：大矢 均 編集人：八島 充 <https://www.healthbusiness-online.com>  
〒101-0021 東京都千代田区外神田6-5-3 倍楽ビル新外神田5F TEL.03-3839-0751 FAX.03-3839-0753 info@health-mag.co.jp 年間購読料：14,520円(税込) 振替口座：00190-5-611380